

以下は、今後記入すべき内容のプロット（このページは未完成です）

皇統無私の伝統

「仰せの通、身に欲なく、天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候こと、人君たるものの第一の教云々」

たまたま、その秋、殿下は京都に御旅行になり、京都御所内にある仙洞御所に一週間御滞在になったことがある。京都御所内には数棟の土蔵があるが、そのうちの一つ、別に目立たぬ普通のお蔵のようではあるが、これが所謂東山御文庫で皇室にとっては非常に大切なお蔵である。扉には勅封が施されており、毎年秋季に東京から特に侍従が差し遣わされ、開扉の上、約一ヶ月かけて内臓品を曝涼するのが例となっている。内蔵されているものは御歴代の宸翰、旧記の類である。

殿下の京都御滞在が、ちょうど、この曝涼期間であったため、一日、殿下はお蔵拝見においでになった。私もお供をしていたため内部を拝見する機会を得たのであるが、多くの陳列品のうち、たまたま私の眼にうつったのが光格天皇の御書簡であった。

明治天皇より三代前の光格天皇は幼少僅か九歳で閑院宮家から入って帝位を継がせられ、御先々代、後桜町上皇（女帝）の並々ならぬ御訓育を多年に亙り受けさせられた次第であるが、おん年二十九歳のとき、その上皇に対して、したためられた御書簡がこれであった。別にゆっくり拝読したわけではなかったが、

「仰せの通、身に欲なく、天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候こと、人君たるものの第一の教云々」

のお筆の跡に、私は一瞬電撃を感じた次第であった。大江戸城によって天下を睥睨する徳川幕府全盛の時代にあつて、三十六峰に包まれた、ここ京洛の地、清くさやけき御所のうちには、人知れず寂かに天下万民をのみ念とせられる御精神が脈々として皇統のうちに流れていた長い年月のあったことを初めて知り、私はおのずから身の引き締まるのを覚えた次第であった。

右の御書簡の外、いろいろなお歌を拝見しているうちに、私は大いに覚るところがあつた。東山御文庫に充満する空気は「無私、ただ、くにたみを念（おも）う」の一言に尽きる、と私は観たのである。

その夜、京都市民の盛大な提灯行列が催され、一群また一群と数万の人々が仙洞御所の御門前を通り、万歳の声は広い御苑内を埋め尽くした。殿下は提灯片手に御門のところに立たせられて歓呼の声にこたえられ、私もお側におつたが、そのうちに私の両眼から玉のような涙が次から次へと出てきて、何ともしようがない。いくら暗がりでも、あたりの人に余り恥ずかしいので、私は提灯の列を横切って反対側の人のいない芝生に逃れでて遠慮なく泣いた。殿下は、この万歳の声を、どんなお気持ちでお聞きになっておいでになるだろうかと思うと、涙が止まらない。今日の昼、ごらんになった東山御文庫内の烈々たる芳香は、いま殿下を厳しく且つ暖かく包んでいるに相違ない。いま聞えるこの万歳の歓呼の声は、結局は歴代の聖天子の御余徳に対する京都市民の感謝の声ではないか、積徳の余栄に、いま、このお若い殿下が酔われてはならぬ、と思うと、居ても立ってもいられない気持ちになった。

～木下道雄（元侍従次官）著『宮中見聞録』京都東山御文庫の章より引用

（第119代 光格天皇より第117代 後桜町上皇に宛てた宸翰・現代語訳）寛政11（1799）年

（後桜町上皇）仰せの通り、仁君は仁を本といたし候事、古今和漢の書物にも数々これある事・・・（中略）・・・仰せの通り、何分自分を後にし天下万民を先とし、仁恵、誠信の心、朝夕昼夜に忘却さざる時は、神も仏も御加護を垂れ給ふ事、誠に鏡に掛けて影をみるがごとくに候。・・・（中略）・・・御厚意御念、此の御書付、実に実在有りがたく有りがたく存じまいらせ候。

（昭和天皇、宮内記者の質問への返答）昭和52（1977）年8月

国体というものは、日本の皇室は、昔から国民の信頼によって万世一系を保ってきたのであります。・・・（中略）・・・また（歴代天皇も）国民を我が子と考えられてきたのであり、それが皇室の伝統であります。・・・（中略）・・・日本の皇室は、世界の平和と国民の幸福を祈っていると云うことでは、昔も今も変わっていないと思います。

「国民（くにたみ）を治らす（しらす）」～天皇統治の本義とは何か

- ・ 災害を見舞われる天皇皇后両陛下（写真）
- ・ 「しらす」（治らす＝知らず、「しる」の尊敬語）とは、国民の事情を知ること。（西洋的な「国民を支配する」概念とは完全に別個）
- ・ 初代天皇（神武天皇）の諡号は「ハツクニシラススメラミコト（初めて国を「知らず（治らす）」天皇）」
- ・ 皇室のあり方を体現された仁徳天皇

天壤無窮の神勅～日本書紀の伝える天皇統治の起源

- ・ 天照大御神から国を「しらす」ご命令を受けて天下った皇室のご祖先
- ・ 神武天皇のご即位
- ・ 天壤無窮の神勅にみる予定説<http://d.hatena.ne.jp/jinkenvip/20070105/1167993109>

祭祀と統治の聖なる統合

- 古代においては、世界のあらゆる民族/国家において、祭事（まつりごと）は政事（まつりごと、政治）であった。
- 日本においては、この古代の祭祀と統治の統合の伝統が、現代も脈々と受け継がれている。
- 権力と権威の分離の伝統

皇室の起源と歴史について

- 神武即位紀元の由来（辛酉革命説）
- 欠史八代の実在性
- 戦後のマルクス主義（唯物史観）派の王朝交代説を排す

上記3項目は、[歴史問題の基礎知識](#)を参照して下さい。

- 昭和21（1946）年元旦の「新日本建設に関する詔書」（所謂「人間宣言」）の誤解を解く

参考リンク

[竹の間～竹田恒泰氏（旧皇族竹田宮家）ホームページ](#)
[人間宣言と木下道雄](#)